

平成 19 年 12 月 17 日付け 日本経済新聞の「私の苦笑い」の取材を受け、次のようなお話をしました。

二〇〇三年一月から一年半務めた財務官時代の大きな仕事は円高防止だった。在任中の円売り・ドル買い介入は約三十五兆円に達し、海外メディアから「ミスター・ドル」と呼ばれたりしたが、これは政府と日銀が一体となったデフレ対策だった。日銀が福井総裁の下で、異例の量的緩和を行うのとあうんの呼吸で異例の大量介入を行ったのだ。

実は、日々介入をやりながら、私はある秘策を模索していた。円、ドル、ユーロの三通貨間の為替相場を、日米欧が協力して一定の範囲内に安定させる「参考相場圏」の構想だ。日本だけの介入では効果が限られる。米欧も付き合ってくれないかということだ。彼らも日本がデフレ・スパイラルに陥るのは世界経済にとって危険だと思っていた。

世界経済の重要問題は七カ国財務大臣代理（G 7 D）が頻繁に集まって協議していたが、微妙な為替相場の問題を話すのには参加者が多過ぎた。しかし九九年に欧州にユーロが創出され、為替・金融政策も一本化されて、欧州の参加者が絞り込める環境が整ってきていた。そこで日米欧でG 3代理会議を作ろうということになった。秘策を米欧と相談しうる場ができた。

〇三年七月、米国カリフォルニアのスタンフォードで第一回会合を持った。参加者は、私と、米国のテラー財務次官、ドイツのコッホヴェーザー財務次官。地元のテラーが選んだ会場は「ボックス・オブ・ウッドサイド」という郊外のレストランだった。G 3の秘密会合が、シリコンバレーのベンチャー企業家が集まるカジュアルなアメリカン・カフェのようなところで開かれているとは、回りの誰も気づかない。

私はあの秘策を二人に打診した。伝統的に為替介入を嫌う米国のテラーが反対なのは予想していたが、欧州は日本と同じようにドル安・ユーロ高に困っていたので、関心を示すかもしれないと期待していた。しかしコッホヴェーザーは乗ってこなかった。私の「大胆な提案」に困惑する二人の表情に、私はやはりそうかと思わず苦笑いせざるを得なかった。のちにテラーは自著の中でコッホヴェーザーが反対してくれて助かったと書いている。

かつてドルの安定が揺ぐと、独仏などが日本と一緒に米国を批判する側に回り、むしろ欧州から為替相場の協調を求めることもあった。しかし、欧州はユーロを創出し、ユーロをドルと並ぶ基軸通貨にしようとしていた。少々の相場変動があってもドルのように介入しないで耐えられる「大きな」国際通貨であることが必要だと考えているようであった。私は、ユーロが円よりもはるかに大きな経済圏をバックにするようになり、国際通貨としては円はユーロからかなり引き離されたなと感じた。

私の秘策は日の目を見なかったが、G3で非公式に率直な意見交換を行うことは相互に誤解を防ぎ、疑念を払うのに大いに役立った。米欧当局は、日本の大量介入を積極的に支持はしなかったが、日本がそれを必要とした厳しい経済状況にあることは理解し、公然とは批判しなかった。だから、大量介入が可能になったというのが私の実感だ。